

コトワザあらかると3号



2019 年 11 月 1 日
日本ことわざ文化学会

第3号刊行によせて 一三のつくことわざ一

日本ことわざ文化学会理事 石原 仁誌

本日ここに、私ども日本ことわざ文化学会の同人誌『コトワザあらかると』の第三刊を発行することが出来ました。まず、会員の皆様、特に今回執筆いただいた会員の皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。中には第一刊から連続で投稿いただいた方やコラム、エッセイの両方に投稿いただいた方もいらっしゃったと思います。かく申す私も三刊連続でコラムを投稿いたしました。また、今回初めて投稿いただいた会員の方もいらっしゃると思います。いずれの会員の皆様もありがとうございます。

HPで皆様に投稿依頼をする際に「三年経てば三つになる」ということわざを挿入してご案内いたしました。皆さんは三のつくことわざでどんなものが思い浮かびますか。私どもの月例会『文殊の知恵』のネーミングは「三人寄れば文殊の知恵」そのものですね。

これも学会HPでの会員活動では紹介しましたが、私どもの学会の所在地になっている岡山理科大学で2017年の12月に三木理事のお手伝いで、理系の学生に『数字とことわざ』というテーマで授業を行いました。

その際にも三のついたことわざを学生にいくつか紹介しましたが三のつくことわざも結構多かった記憶があります。

その際に「三のつく地名(三田、三原、三島、三浦、三野、三牧等)も多いよ」という話と、「これらはもともと天皇の管理する御田、御原、御島、御浦、御野、御牧の地名の御の字を用いるのはおそれ多く三に変えた」という話も学生にしました。

おそらくそのような地名や地名をもとにした苗字などから三のつくことわざもよく目につくようになったのでしょうか。

さて、私どもの日本ことわざ文化学会は発足して十年を迎え、先般『第10回総会・大会』を終了しました。「石の上にも三年」を三度繰り返したこととなります。申し上げるまでもなく我々は座してそれぞれの三年間を繰り返し過ごしていたのではなく、会員相互の啓発のための学会本の発行や、既に100回を数えた月例会の開催、また、インターネットを利用した学会誌の掲載、そしてこの同人誌と色々なことに取り組んでまいりました。

今後、迎える十年が私どもの学会としてどのような十年になっていくかは、我々学会員一人一人の活動にかかっているのではないのでしょうか。発足当時から会員だった方々も十歳、歳を取られました。我々の学会もご多分に漏れず、高齢化が急激に進んでおります。

学会の若返りも我々学会員一人一人が考えなければならない時期に直面しております。ことある機会に若い方々にことわざの魅力、面白さを伝えていきましょう。若い方々に月例会においでいただきましょう。そして会員へのお誘いを積極的にやっていきましょう。

会員の皆様へはお願いごとばかりになってしまいましたが、巻頭の言に代えさせていただきます。ありがとうございます。

(注)文中のことわざは斜字にしました。

目次

巻頭言	(02)
目次	(03)
第1部 ことわざエッセイ		
第1章 「逃げ逃げ家康天下を取る」		
家康の伊賀越えをたどる・歩き旅プラス 蟻川 剛	(05)
第2章 枯れ木も山の 辻 維周	(09)
第3章 イノシシのことわざ 時田 昌瑞	(12)
第2部 ことわざコラム		
第1章 祖父の教え 石原 仁誌	(16)
第2章 ‘惣領の甚六’ と日本の長子文化 小森 英明	(17)
第3章 留学生とアニメの中のことわざ 佐古 恵里香	(18)
第4章 猪突猛進 中村 富美	(19)
第5章 人の振り見て我が振り直せ 藤村 美織	(20)
第6章 「転ばぬ先の杖」		
—五木寛之とことわざ— 三木 恒治	(21)
第7章 芸は身を助く 横田 詞輝	(22)
執筆者紹介	(23)

第1部 ことわざエッセイ

第1章 「逃げ逃げ家康天下を取る」 家康の伊賀越えをたどる・歩き旅プラス

蟻川 剛

織田信長、豊臣秀吉の活躍により、ようやく治まってきた戦国時代、最後に天下を取り幕府を開いたのは徳川家康でした。家康は、姉川の戦いのように勇猛果敢に戦ったのはもちろんですが、連戦連勝だったわけではありません。時には敗れることがありました。しかし、劣勢となり挽回が不可能と見た時には、無謀な戦いには飛び込まず、敵に背を向けて一命を保ち再起を期しました。そして、最後には天下の覇者となったというのが、このことわざの意味です。「逃げるが勝ち」と同じ意味です。

例えば、武田信玄に大敗して浜松城に逃げ込んだ三方ヶ原の戦い、真田幸村（信繁）の家康の首を狙った必死の追撃を逃げ切った大坂夏の陣が挙げられます。さらに、最大に危機であったといわれるのが「神君伊賀越えの難」と呼ばれる、本能寺の変の時の逃亡です。

家康が、本能寺の変を知ったのは、堺見物を終えて京へもどる途中でした。信長の勢力圏内の見物のため、同行しているのは、十名足らずの重臣だけでした。信長の悲報を知った家康は、一時逆上して、寡勢のまま明智勢に討ち入ろうか、所を得て自害しようかとまで考えました。しかし、思い直して、何とか領国の三河へ戻って態勢を整え明智勢に対抗しようと決意しました。そのため、京を避け、伊賀の山中を突破して伊勢の海岸に出て、海路で三河へ帰国する経路を選びました。伊賀越えの道は、敵味方いずれとも知れぬ勢力が存在し、さらに落武者を狙う者たちも覚悟せねばなりません。山中の道なき道に行くだけでなく、命を常に狙われていることを考えねばならず、この逃亡の数日間は、家康の生涯の最大の危機であったといわれるのも肯けます。

徳川家康の伊賀越えの道に出かけたのは、2013年2月でした。名古屋から伊勢神宮へ行った道から外れ、四日市から伊賀上野へと向かいました。伊賀上野は、一度は訪れたいと思っていた地で、家康の伊賀越えの道をたどるとなると、一層興味が湧いてきました。

加太峠を越えることになる前日の2月22日には、四日市から旧東海道沿いに亀山、そして関まで進んで、いったん宿のある津新町に戻りました。当日の23日の早朝、津新町から亀山へ向かいました。関は、亀山の次の駅ですが、JR東海と西日本の接続駅の亀山では、必ず乗り換えねばなりません。亀山に向かう車窓からは、早春の不安定な天候のためチラチラと白いものが降っているのが見えてましたが、すぐに止みました。

亀山で乗り換えて関の駅に着いたのは8時をすぎたばかりで、ほとんど人影はありません。関の駅前には国道1号線走っています。関の宿場は、その国道を越えた町の中にあります。国道1号線が、旧東海道の関宿を迂回してくれたおかげで、関の宿場町の姿が残されたこととなります。関の駅から国道を渡り家の間の道を抜けると、関の宿場町のほぼ中央に出て景色が一変します。

旧東海道の関の町並は、東西の追分の間約1.8キロメートルに、江戸時代から明治時代にかけての約200軒の町屋が残っていて、建物のつくりや細かい意匠に往時をしのぶことができます。保存されている宿場町の規模はたいへん大きく、時間をかけて楽しむことができます。町並の途中には、関宿が江戸から約百六里であることから「百六里庭・眺関亭」という施設があり、そこへ上ると宿場町の様子を上から見ることができました。また、「関の山」の語源となった山車が展示されている「山車蔵」もあります。

が、こちらは、開館時間に合わず見ることができませんでした。

ようやく人影が現れ始めた宿場町を西へと通り抜けて行きました。家並が終わる関宿の西の出口に着くと、すぐに追分がありました。一方は、鈴鹿峠に向かう旧東海道の国道1号線。自動車が次々と通っています。もう一方は、伊賀上野に向かう大和街道の国道25号線。しかし、今では、旧国道25号線と書かれているものもあり、このあと「旧国道」と記していきます。これから伊賀上野に向かうので、追分以後の道を取り、国道1号線に別れを告げました。

国道1号線から別れると、自動車の通行はほとんどなくなり静かになりました。道路も凸凹のところがあり、少々頼りなくなりました。すぐに鈴鹿川を渡り、加太川に沿った谷間の道を上流に向かって進んでいきます。谷間が狭くなり、川越しの谷の対岸に木の間隠れに、鉄道が見えます。関駅から伊賀上野へ向かう関西本線の鉄道が、加太川の谷の対岸を並走して、西へ延びています。谷沿いの道は、山が迫っていて、人家も見えず、早くも山が深くなってきた感じがします。人工的なもので目に入るのは、対岸の鉄道だけです。その鉄道が、しばらくすると鉄橋を渡ってこちらの岸にやってきました。谷が狭くなって、一方の岸に寄ってきたのです。鉄道と並んで歩いてきた道が、短いトンネルをくぐって斜面に沿って蛇行をし始めると、鉄道は鉄橋を渡ってまた対岸へ行ってしまうました。そして、鉄道はトンネルに入り、すぐ抜けるとまたすぐ次のトンネルに入りました。そうしないと通り抜けられない難工事に思えました。

2つ目のトンネルを抜けた鉄道は、再び鉄橋を渡ってこちらの岸にやってきました。道は、その鉄道を踏切で越えました。鉄道は道路より山側を走るようになると、険しかった谷もようやく抜けて、前方に盆地のように広がった加太(かぶと)地区が見えてきました。まだ早春というにも早く、緑は目に入りませんが、農地が広がっていて、人家も点在し、それらをつないで道路が走っています。

盆地に入るとすぐ、鉄道の加太駅がありました。関・加太・柘植と駅が続くので、加太峠の東側では最後の駅になります。鉄道は、山側を通っているので、歩いてきた旧国道から上り坂で駅に向かいました。駅が近づいても商店などはなく、駅のすぐ近くに新しい住宅が建っていました。その住宅のわきを通って駅に着きました。駅は無人駅で、駅舎もプレハブのような簡素なもので、昔の姿をとどめています。ホームに出て駅名の表示板で、加太のふりがなが、「かぶと」であることを確かめました。(和歌山に南海鉄道加太線というのがあります。こちらの「加太」は「かだ」と読むはずです。)加太駅は、周囲より少し高みにあるので、盆地を見渡すことができました。厚い雲の下、山に囲まれた中で、加太川の両岸に農地が細長く広がっているのが見えました。

加太駅から下って、また歩いてきた旧国道にもどり、歩き続けると、だんだん人家が減り、また狭い谷間にさしかかりました。旧街道には梶ヶ谷峠があり、昔の姿をとどめているという、案内板がありました。しかし、歩いてきた旧国道は、その峠を避けて、山裾を通り抜けていきました。すると、再び、盆地が開けてきました。

今度の盆地も、同じ加太の名のつく集落が集まっています。駅こそありませんが、家の数は多く、学校や郵便局、商店もありました。自動車が増えてきました。というのは、すぐ近くに車の多く通る道路が見えます。これが、旧国道25号線に代わって造られた新しい国道で、今では、この道路の利用者がほとんどらしいのです。新しい国道は、加太峠を通らず、南側をトンネルで抜けて、伊賀上野に行ってしまうます。

歩いてきた道もいよいよ盆地の加太の集落を抜けて、もう人家がなくなってしまうました。すると、前方に堤防のような壁が立ちはだかっていました。コンクリートではなく、盛り土の壁です。これは鉄道の

ための盛り土で、これから加太峠に向かって徐々に高度を上げていくために、勾配をつけて造られていて、この上を鉄道が通っています。高度を上げた鉄道も、最後には加太トンネルを抜けて柘植へと下りていくことになります。盛り土に阻まれたように見える旧国道も、ちゃんとその盛り土をくぐり抜けられるようになっています。幅15メートル余り、長さ4,5メートルの大和街道架道橋呼ばれる短いトンネルのようなものでした。

架道橋をくぐると、もう人家のない地域になりました。草地や林の間を道が続いています。ずっと遡ってきた加太川も最上流部になり、時折姿が見えるだけになりました。時間をおいてダンプカーが通り過ぎていきます。そう思っていると、ガガガガ、ドドドンという機械音が聞こえ始め、それが近づいてきます。それは、道路のわきの大きな採石場から出ている音でした。山の斜面を大きく掘り崩して、背の高い機械や工場のような大きな建物があります。そして、ダンプカーが何台もいて、それが道から出入りしています。ダンプカーを避け、出入口に注意しながら採石場の前を通過しました。

採石場の音が遠ざかって聞こえなくなると、道は上りの勾配が少しくつくなってきました。斜面にそって道が続き、沢があるとコンクリートの橋がかかっています。まわりの景色を見ながら歩いていると、奥多摩の林道を歩いているような気もしてきました。ただ、旧国道だけに車が2台すれ違える幅があります。しかし、出会った自動車は、数台に過ぎませんでした。

道は、いよいよ林の中に入り、薄暗くなってきました。空は、木々の間から見えるだけで、ますます林道らしくなってきました。そして、道が上り坂から下り坂へと変わりました。ここが峠なのだろうか。とくに、何の標示もありません。ただ、周囲には林がずっと続いているだけ。静かで、聞える音は風の音だけでした。このあたりが加太峠でしょうが、旧国道が通っているとはいえ、やはりさみしい所でした。

下り坂の道が続くと、木々の間から人家も見えてきました。峠を越えて柘植の地に入ってきたのがわかりました。すると、急に広い道路に出ました。でも、まだ、道のり面が整備中なので、未完成でした。この新しい道路は、柘植側から延びてきていますが、先ほど通ってきた峠は通らず、その下の抜けていくようでした。前方に伊賀の盆地も開けてきました。また時折、風花が舞っていました。

柘植の駅は、町の中心部から離れるので、駅には向かわずに、柘植の町の中へ入って行きました。塀や植え込みに囲まれた庭のある家々が続く、住宅の間を歩いて行きました。その時、不思議な感覚を感じました。時間帯は真昼だというのに、人影が見えません。通っている両側の家にも人影は見えません。それなのに、いくつもの家の中から見られているような視線を感じたのです。柘植という忍者の里への意識がそうさせているかもしれませんが、不思議な感覚でした。やっとすれ違った人も、故意に視線を合わせないようにしているのではないかと思ってしまいました。

道路が鍵の手に曲がったところで、表示板が目にとまりました。建物の壁に「徳川家康が、加太越えの前に宿泊した所」という趣旨でした。ここまで歩いてきた道が、間違いではなかったと安心しました。その先に、道に面した小さな広場がありました。案内板によれば、小説家の横光利一が、父親の鉄道の仕事の関係で、この地で少年時代を過ごし、その作品から、「はねつるべ」の家の跡とされていて、敷地の中に井戸が見られました。

柘植を過ぎ、夕方には伊賀上野の駅について、この日の歩き旅を終えました。

その後、2015年11月、滋賀県甲賀市信楽町にいる大学時代の同窓生を訪ねた時のこと。信楽は狸の焼き物で名高い陶器の町です。町の中心部には、陶器を売る店が軒を連ね、大小の狸の焼き物が林立して

います。その時、宿泊に連れて行かれたのが、「多羅尾の湯」という温泉施設でした。多羅尾地区は、信楽のさらに南に位置していて、三重県の伊賀上野に接している県境の地です。

その多羅尾の県境には、司馬遼太郎の「梟の城」の冒頭の章になっている、御斎（おとぎ）峠があります。その峠の近くの見晴らしのいい所に登ると、南側の伊賀盆地が一望のもとに見渡せました。盆地の中の伊賀上野城まで、見てとることができました。そして、そこから下りてきた時、峠の近くの道のわきの新しい案内板が目に入りました。「伊賀越えをした徳川家康が、この道を通ったことが確かめられた」と記されていました。

家康は、伊賀越えの際、堂々と伊賀上野を通ることはできません。山道をこえ、多羅尾の地によやくたどりついた時、当主の多羅尾光俊に招かれ、やっと一晩ゆっくりと体を休めることができました。無事に領国戻った家康は、幕府を開いた後、多羅尾氏に礼として、旗本として取り立てたり、代官としての権限を与えたりしました。

この多羅尾では、明治時代まで残されていた、代官の陣屋跡を調査中でした。

関から柘植までの歩き旅と、滋賀県の多羅尾での見聞により、徳川家康の本能寺の変の後の苦難の伊賀越えの道筋を、いくらかでもたどることができました。京への道から外れた後、多羅尾にたどりつき、柘植に抜けた後、加太峠を越えました。その道筋には、幸運にも家康を援助する勢力がありました。多羅尾の地は甲賀、柘植は伊賀。甲賀と伊賀は忍者の2つの強力な勢力であると知られています。その甲賀と伊賀は山一つを境とした背中合わせの地に存在しています。家康と忍者勢力との結びつきは興味深いところでは。

実際に歩いた加太越えの道は、旧国道になっており、新たな国道が峠の南側を大きく迂回して伊賀上野と結びついています。そして、新しい国道が、今では主要な交通路になっています。また、柘植方面から来ていた新たな道路も加太峠を通りそうもありません。ということは、林道のようにになっていた旧国道の加太越えの道は、ますます人通りも車通りも細り、やがて自然の中に埋もれてしまうのではないかと感じてしまいます。そうなれば、家康が困難を極めたという伊賀越えの道に戻ってしまうのではないだろうか。また昔のような、自然に包まれた、静かな峠になるのではないだろうか。

<旅の句> 風花や関は江戸より百六里

早春の風に真向こう加太越え

(2013.2.23)

第2章 枯れ木も山の

辻 維周

はじめに

2019年で自分の教壇生活は40年目を迎え、今まで教えた学校は代々木ゼミナール、母校の暁星学園、母校の姉妹校である晃華学園など軽く10校を超え、輩出した生徒・学生はおそらく延べ3万人を超えているはずです。その3万人の中には当然ながら様々な学生がおり、色々な体験をさせてもらっています。

さて、一言で「ことわざ」と言っても「格言」「故事成語」「川柳」「四字熟語」など様々な表現の仕方がありますが、今回は創作ことわざを使いながら現代の世相を見ていこうと思います。

蚊のやつに 頭皮刺されて ハゲ実感

髪の毛の薄い人は、それはそれで悩みを抱えているひとも多いと思いますが、逆に髪の毛が多い人はその役割を実感することが少ないのではと思います。

自分のご多分に漏れず髪が薄いのですが、今朝起きたら頭皮を蚊に刺されていて痒いのなんのって・・・ここで初めて「ああ、髪の毛は怪我だけではなく、蚊からも守ってくれていたのだなあ。髪バック！」と実感できた次第です。普段はあまり気にしていないことでも、いざと言うときには役に立つという実例かもしれません。

ベンツ乗り バブル崩壊 今ベンチ

1988年のバブル真っ盛りに一人の実業家と知り合いました。彼は大きな貿易系の会社を経営し収益は絶好調、わざわざドイツまで出向いて本国仕様のメルセデスベンツSクラスを購入し、毎日社用車として乗り回していました。私も何度か乗せてもらったことがありますが、東京～京都を新幹線のグリーン車より快適に移動できたことを覚えています。

ところがバブル崩壊で彼の会社は倒産、彼自身も身ぐるみはがされて一時、公園でホームレス生活をしていました。幸い今では復活し、堅実に中堅企業の社長をやっているようですが、その時彼がしみじみと言った言葉が「お前さあ、金なんて使ったらすぐなくなるんだよ。あの時ベンツSクラスに乗っていた自分が、今ではベンチ暮らしなんだからお前も気をつけろよ」であり、この自嘲的な創作ことわざでした。さしずめ「いつまでも あるとおもうな 親と金」と言うところでしょうか。

あとは野となれ山となれ 都会には野原も山もありません

私は2009年9月より2018年3月までの約8年半、沖縄に住んでいました。特に最初の4年間は石垣島にいたのですが観光客が年々増加し、それに比例して宿泊施設や観光施設が山林を削ってどんどん作られて行きました。この現象は何も石垣に限ったことではなく、都会の郊外でも里山がつぶされて行く光景を見続けてきています。

一度壊した自然は二度と元に戻らないと言う事を肝に銘じ、特に石垣島のように自然が唯一の観光資源のようなところは、目先の入域観光客数にとられることなく環境を保全していただきたいものです。

飛び出すぞ けものは急に 止まらない

自分の専門はロードエコロジーと言って、野生動物の交通事故を調査し、その対策を関係諸機関に提言するものです。特に石垣島在住中は毎晩のように島を回り、事故に遭っている動物のデータを取っていました。たとえば2012年は919件（オオヒキガエルのみで628件）、2013年は2718件（オオヒキガエルのみで2122件）もあったのですが、行政はあまり動かず、仕方なしに個人的に啓発活動を行っていました。

自分は道路には動物が飛び出すものという感覚で走っていますが、多くの観光客にはそんな感覚はありませんから、島の道でも70-80キロで飛ばします。八重山警察に言ってもなかなか取り締まってもくれず、結局島の生物たちは減少の一途をたどっています。

2018年から移り住んだ岡山でもできるだけ毎晩道路巡回をするようにしていますが、やはり夜中ともなると田舎道を100キロ近くで飛ばし、イノシシやシカに衝突して車が大破するという事例も散見されます。

道路を走るときは野生動物が飛び出してくるものという前提で、安全運転をお願いいたします。

枯れ木も山の賑わい

これは創作ことわざではありませんが、このことわざで衝撃的な経験をしたことがあります。

ある日、一通の手紙が舞い込みました。見てみると私が教えた卒業生からで同窓会の招待状でした。しかし中身を読んだとたん凍り付きました。そこには

「先生お元気ですか。早いもので卒業してからもう5年経ってしまいましたので、このあたりで以下の通り同窓会を開きたいと思います。つきましては枯れ木も山の賑わいと存じますので、先生にはぜひご参加いただきたくお願い申し上げます。

日時 ○月×日 17:00～ 場所 ××ホテル

会費 ご招待」

と書かれておりました。

はい、どうせ私は枯れ木でございますよ・・・髪の毛もないし。

破れ鍋にクレラップ（割れ鍋に綴じ蓋）

現代はなんでもかんでも使い捨てになってしまい、修理するより買った方が安い世の中になってしまいました。鍋は多少割れても何とか使えるかもしれませんが、蓋が壊れても修理して使い続けようなどと思う人は、まずいません。

そこでクレラップ（サランラップ）などのラップで蓋の代用をする人がたくさん出てくるわけです。また傘もビニール傘全盛の今では、傘の修理を請け負ってくれるところも少なくなっていました。江戸期には破れた紙は張替え、折れた骨も挿げ替えて長い間使っていたと言います。さらに修理で出た油紙は「ももんじや」という肉を売る店に売ったと言いますし、折れた骨は竹で出来ていましたから、傘屋さんの家の竈の燃料になっていたとか。

江戸期を見習えとまでは言えませんが、この使い捨ての世の中を何とかしない限り、プラスチックご

みの削減など出来るはずもないと思うのですが。

老害は 頭の上の 蠅追えぬ

超高齢化社会になって、若い人の事ばかり気になってあれこれ文句を言うくせに、自分のことは何もできなくなってしまっている年寄りや、硬直化した考え方しかできない年寄り（若者たちはこのような年寄りを「老害」と呼ぶ）が増えてきました。自分も高齢者という年齢間近になってよくわかるのですが、やはり長年生きてくるとプライドと言うものが強くなってきて、若者の言い分は正しいとわかってはいても、なかなか譲歩しようという気持ちになれないのですよね。

老人ではありませんでしたが、私が高校生の時、このような国語の先生がいました。その先生は教員歴が比較的長く、元新聞記者という経歴もあったため、プライドも高かったようです。その先生が現代国語（当時は現代文ではありませんでした）の時間に、ある生徒を指名して教科書を読ませていました。そしてその生徒が「雑木林」という漢字を「ぞうきばやし」と読むと、その先生は烈火のように怒り、「お前は高校生にもなってこんな漢字も読めないのか！これはザツボクリンと読むんだ！」と怒鳴ったのです。

怒鳴られた生徒はポカンとして、「だってゾウキバヤシと読むのが普通じゃないですか？」と切り返し、さらに他の生徒が辞書を取り出して先生に、「ほらゾウキバヤシと書いてあるじゃないですか！」と意見しました。するとあろうことかその先生は、「馬鹿野郎！その辞書は古いんだ！辞書が間違っているんだよ！」と強弁してしまったのです。その後、授業が紛糾したのは言うまでもありません。

悪いことに、私が出た学校は小中高一貫教育の男子校でしたから、その話はまさしく「悪事千里を走る」勢いで、その日のうちに全校に広まってしまったのです。さらに自分の息子を母校に入れる親も多いことから、40年以上経った今でも「この学校には昔ゾウキバヤシをザツボクリンと読んで、生徒から指摘されても間違いを認めようとしなかった先生がいたらしい」という噂話が伝えられているとか。いやはやプライドがありすぎるのも困ったものですね。

しかしそのプライドをある程度捨てて、若者の意見を取り入れてみると、案外スムーズに流れることも多いようです。やはり「老いては子に従え」なのでしょう。

物言へば ハラスメントと 秋の風

我々が学生の頃は教員が何を言おうが、それに異を唱えることなど出来ない雰囲気はプンプン匂っていました。しかし今、それをやるとすぐ「パワハラだ」「アカハラだ」「セクハラだ」と言われ、学内のハラスメント委員会に掛けられるケースも多くなってきました。まさしく「口は禍の元」なのでしょう。

しかしよく考えてみると人は様々な考え方を持っていますので、学生や部下などと話をするときは、相手を十分知ったうえで話すことが重要です。また、話すことを仕事にしている人は、非常に寂しいことかもしれませんが「自分の時は大丈夫だったから、今回も大丈夫だろう」と考えずに、余計なことは三猿になるしかないのかもしれませんが。また学生たちと話をしていても、昔のようにさも教授然として権威付けをしている教員よりも、教授らしくないフランクな態度の教員のほうが好まれる傾向にあるようです。

何はともあれ、言動にも十分注意するに越したことはありません。

第3章 イノシシのことわざ

時田 昌瑞

前号で干支の動物である犬を取り上げたので、本年も干支の猪を対象にすることにした。

◆干支の動物のなかで最も少ない

12ある干支の動物のことわざのなかで一番多いのが馬で、一番少ないのがイノシシとみられる。ただ、猪武者とか猪突猛進などの熟語の類は除き、イノシシの古称である豕やしし(猪)も含んでのことになるのだが…。まずは手ごろなことわざ辞典である『新明解故事ことわざ辞典』(約7000語句 三省堂)からみてみる。○豕を抱いて臭きを知らず(自分の欠点や醜さは、自分では気づかないとの譬え) ○猪も七代目には豕になる(変化が無いようでも長い間には成長や変化があるとの譬え、猪が飼いならされて豚になることから言う) ○しし(猪)食った報い(禁止されたことを犯して受ける報い、また、自分だけよい思いをしたために受ける苦しみ) ○山より大きな猪は出ぬ(大げさな話を皮肉っていう、また、入れ物より大きな中身は無いということ) ○遼東の豕(世間知らずの譬え)の5つしかない。

つぎに日本最大の収録数の『故事俗信ことわざ大辞典(第2版)』(約45000 小学館)では三省堂のものに加えて、○豕を憎みて臭きを愛す(大元となるものは憎んでいるのにそこから派生するものには寛大なことから、一貫性のない考えの譬え) ○猪の手負い(気が立って危険なさま) ○猪は射手の前、焼酎は上戸の前(物にはそれぞれ相応しい場所があること) ○馴染みでは猪の子も可愛い(そばで馴れ親しめばどのようなものにも情が移るものだとの譬え) ○後さき見ずの猪武者(強いだけで向こう見ずの武者、思慮分別を欠く者) ○片皮(カカ)破りの猪武者(状況を考えずにがむしゃらに突進する者、片皮は武士が騎馬の際に腰から脚にかけて被いとしたものの片方のもの) ○ししの掘ったよう(あちこち乱雑に掘り散らかしているさま) ○しし見て矢をはぐ(手遅れの譬え 矢をはぐは矢を作る意) ○天然礫(ツブテ)に猪(シ)を打つ(偶然幸運が転がり込むことの譬え)の9つが挙がる。合計で14しかなく、300を越す馬や犬に較べその差は大きい。

★主に用例リストから

次に筆者がこれまで集めてきた用例リストから見出したものを紹介したい。

○猪は金の運と勝負運を開く(金運や勝負運がある):これは古い文献には見当たらず戦後になって新聞類で見られるもの。

○猪頭(チョウ)をかけて犬肉(ケンク)を売る(見かけと実体が異なること):『金色夜叉』で有名な尾崎紅葉の『著作先生「夢中夢」』にだけ見られる珍しい語句。おそらく「羊頭狗肉」を踏まえた創作か、バリエーションかと推測される。

○向かう猪に矢はたたず(勇敢に立ち向かって来る者には敵しがたいこと):江戸期の近松門左衛門などに4例ある他、カルタにも1つある。ここの猪を鹿としたものもあり非常に紛らわしい。鹿になると「向かう」を顔を自分に向ける意とし、逆らわない者は攻撃できないとの逆の解釈になる。現代のことわざ辞典は鹿の例しか載せていないが、藤井乙男『諺語大辞典』(明治43年)では猪になっているにも拘わらず鹿の解釈になっている。ここの解釈を難しくしている要因が、平仮名で「しし」とあるためであり、その上、「しし」には猪とも鹿とも両方の字が当てはまるからだ。現代の辞典の記述は、藤井

の説に引っ張られてしまった結果ではないだろうか。

○逃げた猪の大を誇る（逃がした魚は大きいの類）：これは吉田松陰が安政6年（1859）に岡部富太郎宛てに書いた書簡にあるのが唯一。同義のことわざで現在よく知られるのが「逃がした魚は大きい」だが、じつは明治時代に外国から入ってきたものとみられる。以下、松陰以降のものを早い順に示すことにする。「逃げた鯉が大きい」（二葉亭四迷『小説の題のつけ方』 明治41年）、「逃げた鯰は大きく見へる」（和漢泰西俚諺集 明治23年）、「逃がした泥鰌は大きい」（いろは短句 明治23年）、「逃げた猪は大なり」（国民の品位 明治24年）、「逃げた鰻は大きく見へる」（新選俚諺集 明治34年）、「逃げた魚（鯰鰻）は大きく見へる」（日本俚諺大全 明治39年）、「逃がした魚は大きい」（熊代彦太郎『俚諺辞典』 明治39年）とある。そして明治43年の藤井乙男『諺語大辞典』には「逃ゲタ魚ハ大キイ」との項目に「逃ゲタ鯰ハ大キク見エルとも逃ゲタ鰻ニ小サイハナイともいふ。Every fish that escapes, appears greater than it is.—Turk.」とあり、トルコからのものとしている。また、来年3月に刊行予定の『世界ことわざ比較辞典』（岩波書店）には「逃げた魚は大きい」がグルジア、ネパール、トルコ、「逃がした魚は実際より大きく見える」が英語、ルーマニア、韓国にあることから「逃がした魚は大きい」が外国生まれであることは確かであろう。要するに松陰が用いた言い回しは現代の常用ことわざである「逃がした魚は大きい」の先行形であったといえそうだ。

○猪の尻もちつき（思いがけない幸運に出会うことの譬えか？）：これは昭和2年に発行された<藤村いろは歌留多>（島崎藤村作、岡本一平画）にあるもの。小説家島崎藤村が案出した創作と推測されるユニークなもので絵も有名な漫画家・岡本一平が描いている。47枚組の新案のいろはカルタの一種であるが、「藪から棒」「持ちつ持たれつ」の2点は既存のことわざが用いられている。主なものには、「鼻から提灯」「鶏のおはようも三度」「星まで高く飛べ」「へそも身のうち」虎の皮自慢」「賢い鳥は黒く化粧する」「雪が降れば犬でもうれしい」「オウムの口に戸はたてられず」「セミはぬけがらを忘れる」など色々な動物や、滑稽味のあふれる語句が目立つ。冒頭の「い」は「犬も道を知る」。このように収められた45の語句には説明もないし既存のことわざ辞典にもないので、意味は想像するしかなかった。そこで「猪の尻もちつき」の意味を推定するために絵札に注目した。絵柄は、あろうことか山から転げ落ちた巨大なイノシシが尻もちをついて目をまわしている場面に遭遇した猟師が大笑いしている情景のものだ。ここのポイントの一つが猟師の表情だ。この猟師がいなければ、猪突猛進で知られるイノシシが尻もちをつくなどあり得ぬ話なので、このイノシシの姿であれば「猿も木から落ちる」「河童の川流れ」のイノシシ版になるだろう。しかし、猟師の笑い顔があることは、彼にとってラッキーを意味していると推測した。そこで「棚から牡丹餅」と同じような意味ではないかと考えた次第だ。

まとめ

以上、挙げたことわざは全部で19しかない。干支の動物では羊と並ぶくらいに少ないし、現代人に馴染みのものとなると僅か数例になってしまう。他方、歴史的にみれば、大部分のものは江戸期や明治期になるが、最も古い例が鎌倉時代の軍記物『保元物語』に「片皮破りの猪武者」とあることから、長い歴史をもつものもあると分る。

また、いろはカルタに採られた例が3点もあることは注目すべきことだろう。江戸後期にでた<道才かるた>には「向かう猪に矢立たず」、明治後期の新案系<いろ2組50句ことわざカルタ>には「豕を抱いて臭きを知らず」、昭和2年の<藤村いろは歌留多>には「猪の尻もちつき」とあるからだ。なお、

ことわざの図像表現にも江戸期と明治期のものが3点ほどあるが、絵柄の意味するところが分からないものもある。このようにいろはカルタやことわざ絵が存在するということは、イノシシが案外古くから親しまれてきた動物であったことを裏付けるものかも知れない。

最後に「猪の尻もちつき」について少し補足して終りとしたい。イノシシに対するイメージは向こう見ずで恐ろしい存在とみられるし、時には作物を荒らす害獣ともなる。他方で「やまくじら」として食べられていたように牛肉が西欧から入ってくるまでの獣肉の代表的なものだった。このような背景でカルタの絵をみると、山くじらを求めて山深く分け入った猟師が、突然、ご馳走となる尻もちをついた巨大な猪に出っくわして歓喜している様子とみることができる。「棚から牡丹餅」どころではない望外で巨大な喜びだ。こんな楽しいことわざはざらにはない。ぜひとも継承して残しておきたいものなのだ。

図

向かう猪に矢たたず

猪子ママを抱いて臭きを知らず

道才かるた

いろ2組50句ことわざカルタ

猪の尻もち

藤村いろは歌留多

第2部 ことわざコラム

第1章 祖父の教え

石原 仁誌

平成最後のお釈迦様の誕生日、花祭りの日に長男夫婦に娘が誕生しました。私にとっては初孫の誕生です。花にちなんで「すみれ」と名付けました。60歳で定年退職して引き続き勤務している私に「おじいちゃん」という意識はありませんでしたが、これで世間並みに「おじいちゃん」の仲間入りを果たしました。

これを機に私の祖父の話しを少しさせていただきます。私は昭和30年生まれですが、母方の祖父は私が生まれた時既に他界しており、ここで言う祖父とは父方の祖父にあたります。はっきりした記憶はありませんがその祖父の生年は明治28年頃だったと思います。

現在の長野県下伊那郡根羽村の生まれで、今で言う中学校卒業後名古屋に出て、洋服の裏地加工を産業に、私の父(大正15年生存命)を筆頭に男女4人の子供を育て、喜寿の祝の翌年、私が大学1年生の時に他界しました。私が幼い頃のお盆には祖父の卒業した根羽村の小学校で開かれた盆踊りに親戚一同が集い、盆踊りをしたことを懐かしく覚えています。

当時は私の家族は父の仕事の関係で東京に住んでおり、夏休み、冬休みに名古屋の祖父の家に泊りがけで遊びに行くのが何よりの楽しみでした。特に楽しい思い出として残っているのは正月に祖父を囲んで、いとこや叔父、叔母たちと祖父の家の正月ならではの遊びに興じた思い出です。

その遊びとは言ってしまうと、いわゆる「丁半ばくち」なのですが、真新しい日めくりと果物ナイフを手にした祖父の周りにみんなが碁石を持って集まり、祖父の「ぐう(偶数)かき(奇数)か?」という掛け声に伴い、それぞれ手にした碁石を日めくりの左右に賭けていく遊びです。果物ナイフでめくった日にち(数字)が偶数か奇数かを当てました。当たると賭けた分と同数の碁石が手に入ります。手にした碁石はひとつ10円で祖父が換金してくれたと思います。ところがそこには落とし穴があり、祖父のめくったところが祭日だと、祖父の「はたびい(旗日=祭日)」の掛け声とともに、日めくりの左右に賭けられていた碁石は「親(胴元)の総取り」とばかりに祖父の手元に集められました。

今でいうブーイングでしょうか孫たちから一斉に「おじいちゃんずるい」という声。そんなときに必ず祖父から「いつまでもあると思うな、親と金。ないと思うな、運と災難。」ということわざが口をついて出ました。

祖父にしてみればそのような遊びを通じて親孝行の大切さ、お金の大切さ、調子に乗ることの戒めを知らず知らずに孫たちに教えてくれていたようです。

私の64年の人生を振り返れば「平穩無事」ということわざがびたりとあてはまるような人生でした。93歳になる父は今も存命ですが母は三年前に他界し、去年は人生で初めて自然災害、台風24号による我が家への直接被害も経験しました。

長い会社生活の中ではバブル景気も、またその崩壊も経験しましたが、おかげさまで入社した会社の社名も合併や倒産等で変わることなく、数度にわたるリストラの嵐もくぐり抜け、41年目の会社生活を迎えている今、つくづくこのことわざの意味合いを実感します。

平成から令和に替わったこれからも、このことわざは我が家の家訓として孫に伝えていこうと思います。

(注)文中のことわざは斜字にしました。

第2章 ‘惣領の甚六’ と日本の長子文化

小森 英明

戦前の旧憲法（大日本帝国憲法）下では、長子が家督を継ぐべきものとして、財産その他も含めて、その地位が憲法で保証されていました。そのためか、こうした長子は、概して、お人好しでおっとり型の人間に育つ場合が多いため、多少の揶揄まじりも込めて、<惣領（そうりょう）の甚六（じんろく）>とも言われました。なお、この<惣領>とは、長子を指します。

実際に、かつての徴兵などでは、長子という立場で入営した場合、その人は特別に考慮され、最前線での戦闘から外されたこともあったらしいのです。

また、ある識者によると、戦前の受験戦争があまりヒートアップしなかった原因として、旧憲法下では、長子による家督相続が認められていたため、社会に出るために学歴等を高めることが不要と見なされていたからだ、と指摘しています。

翻って現代の日本では、‘少子高齢化’が猛スピードで進行しています。これは、事実上、極めて少ない兄弟・姉妹（1~2人）たちが、老いつつある二人の親を支えていく世の中へと変貌しつつあることを意味しています。

そのためか、このところ、地方公務員を志望する学生が多いような気がします。仮にその試験に受ければ、（自分が生まれ育った）地方に就職をすることが可能となります。

さらに、公務員を志望しなくても、有力な資格（例えば介護・看護職等）を取得すれば、自らの郷里の近辺でも就職できるため、地方の私立学校（専門学校・大学）等では、何らかの資格が取得できる学科・学部等を開設しています。

これに比して、全国展開を前提とした、競争力旺盛な日本の大手企業等が求めているのは、高学歴で転勤を拒むことのない優秀な人材です。これらの条件を簡単に満たせるのは、どちらかと言えば、大卒程度の高い学歴を有する次子ということになります。大手企業に限らず、正社員として登用される条件の一つに、転勤を拒まないことを挙げる企業もありますし、何よりも日本の企業文化として、そうしたことが根付いているようです。

こうした一方で、‘ひきこもり’が多いのは男性で、しかも長子の立場にある人の印象が私にはあります（もとより、客観的な統計調査を行った訳ではありません）。

これは、本来、長子の立場にある人がまだ若いうちに（20代）、次子を前提とした日本の企業文化に翻弄された挙句、心身を病んでしまった結果、期せずして‘ひきこもり’に至ったと見なすことも可能です。そして、それは、あながち穿った見解とも思えません。

もっと露骨に言うと、長子は、（あるいは）‘競争’そのものに弱いのかもしれません。‘競争’に弱いということは、企業が大前提としている‘自由競争’にも体質的に与せないことへと当然、連なります。やはり、本来的には<惣領の甚六>である他はない長子が、ともすれば、生来的に生命力旺盛な次子が得意とする‘競争’に敢えてなじまなくてはならないということ自体、土台が無理な注文かもしれないのです。

こうしたことを考え合わせると、今後の日本は、地方の過疎化が進む一方で、若者たちのニーズは長子型と次子型に二分化されるようでもあり、様々な変革が迫られています。

因みに、私（小森）自身は長子で長男であり、かつ一人っ子です。

第4章 猪突猛進

中村 富美

私の中学校では6つの小学校が統合していました。その中でも山の中に家があった友人から聞いた話です。夜中にピアノを弾いても近所迷惑にならず、のびのび育ったと聞きました。何といても隣家とはかなり離れていたらしいのです。山の方にあるためバス通学でしたが、中学校がある場所でチラッと雪が降るときには、山の方はたくさんの積雪になるため、バスは動かず、学校は欠席でした。さらに、面白い話として、「家の中を猪が走っていったことがある」と聞き、私はびっくりするとともに、どんな様子だったのか想像したことがあります。

私は小学校のとき、コウモリ事件を経験しています。夜中に校舎に入り込んだコウモリが登校してきた子供たちに驚き、校舎のガラスに頭を打ちつけながら、一目散に飛び出ていきました。まさに、この行動も猪突猛進の状態でありました。

物事は時により、このような一気の行動が必要かも知れません。が、私はどちらかと言えば、《急いで事は仕損じる》《石橋を叩いて渡る》タイプです。だから、周囲には「のろまな亀」に映ってしまうのだと思われます。

子どもの頃から友人と会う約束をすると、何時間でも待っていました。高校生のとき、友人が来なくて長く待っていたことがあります。当時は携帯もポケベルもありませんから、待ち合わせ場所（某駅前）に約束の朝10時から4時間も待ち続けていました。友人は急な用事ができたが知らせる方法がなく、でも気になったのでと来てくれて、「やっぱり待っていてくれたんだ。」と、残りの時間を、夕方まで友人と過ごしました。

今度は、看護師という仕事での経験です。手術室では周到な準備を整えており、想定内ではありますが、急な対応が必要な場合があります。さらに、精神科では強い不安感を持ち続けて焦っている患者には看護師がド〜ンと構えて“大丈夫”と話すことが大切です。精神病によってはこちらの想像を超えるような言動や行動があり、すぐに対応する必要があります。どんなことが起きてもすぐに対応を迫られる職業であると感じています。

普通に生活をして、毎日同じようなノホホンとした生活が理想ではありますが、人生、突発的なことは起きます。私は30代で交通事故のため、一時は動けなくなりましたが復活しました。40代で母の数回の救急医療、50代で両親の介護に振り回されました。しかし、「急なことが起きても動じない」ところがある私は、乗り切れたかなと自分をほめてやりたいと思います。

人は、長い人生の中で、いろんなことにぶつかります。自分の経験を周りの人に伝え、その人が、少しでも上手に人生を乗り越えることができるように、アドバイスができたらと考えます。

大きなことは言えませんが《経験者は語る》を実行していく毎日を送りたいと思います。

第5章 人の振り見て我が振り直せ

藤村 美織

毎朝、母に電話をしています。20年以上も続く習慣です。別に用事ではなく、きちんとした挨拶をするわけでもありません。

私「もしもし、どう？」

母「おはようございます。まあまあです。朝から暑いわね」

私「今日は、クリニックの日でしょ？」

母「はい、10時に行くのよ。朝から暑いわね」

私「すぐに帰ってきてよ。ふらふら買い物に出かけないで」

母「はい、そうします。暑いからあなたも気をつけて」

電話の対応の調子は、長年ほぼ変わりません。もちろん風邪をひいたり、具合が悪ければすぐにわかります。最近では、繰り返しが目立つようになりました。それでも、返事がすぐに戻ってくるし、私を案じる言葉も忘れません。

昨年末、総合病院で検査をすると、認知症すれすれと診断されました。さらに、もっと重篤なバセドウ病が見つかり、隔週ごとの通院が始まったのです。近所のクリニックには、定期的に行きませんが、総合病院には私も同行するようになりました。そして、この夏、甲状腺機能の数値がようやく正常に戻ったところでした。

母は今年85歳。家事をこなして、同居する弟のために料理や洗濯もします。自立しているのはけっこうなこと。数年前までは、「毎日、お使いに行くのが自分の健康法」と豪語して、笑っていました。それが見る間に、無駄買いが増えて、冷蔵庫があふれるようになり、もう笑っている場合ではない。母のモットーを日々否定し、実家の冷蔵庫の整理が切実な課題となりました。食卓の上にもモノがいっぱいです。かつて「片付けなさい」と、どれほど言われたことでしょうか。出しっ放しにしたおもちゃを捨てられたこともありました。今、同じことをして、仕返しするチャンス到来か!? といえども、食卓の上に散乱するのは、食べかけのお菓子や薬、ちらし、メモ、ペン、輪ゴムなど、どうしてもよいものばかり……。捨てても気がつかれないほどで、復讐の意気が揚がりません。

子供のころを振り返れば、専業主婦の母は、他人から見れば良妻賢母を絵に描いたような女性であり、亭主閑白の父に対して盲従でした。子供より夫が優先で、それはそれでよいのですが、時には子供への裏切り行為もありました。たとえば、友達とプールに行く約束をして、母がまず了解していても、あとで父がノーと言えば、その計画は消えてしまう。「亭主の好きな赤烏帽子」というのは、昭和30～40年代、うちの家族にもあてはまりました。そんなこんなで、母は私にとって反面教師となったのです。

幼いころ、母から聞かされたことわざの一つ、「人の振り見て我が振り直せ」が、今、私自身にあらためて力強く迫ってきます。冷蔵庫の中をきちんとしなくては。モノを買いすぎない。身の回りは片付けるべし。うかうかしていると、私もすぐに同じようになるでしょう。子供のときより、時間の流れは勢いを増して、猛スピードになってきました。気をつけよう、明日は我が身です。

第6章 「転ばぬ先の杖」 ―五木寛之とことわざ―

三木 恒治

先日書店で、五木寛之氏の『白秋期』というタイトルの本が目にとまった。手にとって目次を見ると「ことわざの効用」について丸ごと一章が割かれていたので、躊躇することなく購入して帰宅後一気に読み終えた。著書のキーワードともなっている「60代、70代はもはや年寄りでない」「黄金時代は人生後半にはじまる」といった言葉に慰められたせいか、読了後は夏バテが半ば解消されて爽快な気分になった。

五木文学は平易な文体の中にも人生の真理が随所に鑿められており、その多くは若者の視線で語られている。1970年代の学生にとって、まさにバイブルのような存在だったことは確かである。私もご多聞に漏れず、氏の作品は学生時代ほとんどのものを読み漁った。特に『青年は荒野を目指す』には大いに触発され、異国の地の一人旅に憧れを馳せたものだった。また、最近では東京で一仕事を終えた帰路、遠回りをして金沢を訪れ、内灘海岸に足を延ばしたり、浅野川沿いを散策したりと氏の足跡をたどってみることも「出張」の楽しみの一つとなっている。エッセイ集では『地図のない旅』が私のかつての愛読書であったが、今回出版された『白秋期』はサブタイトルが「地図のない明日への旅立ち」となっている。高齢者にとって「明日への旅立ち」とは、一般的には彼岸へ向けての心の準備のことだ。そう考えると悲壯感が漂うが、ここではポジティブな意味での「諦念の勧め」であり、いわば老年期を迎える者への温かいエールとなっているのである。

本書では相当数のことわざが著者の解釈を交えて紹介されており、総体的には人生の知恵が全巻に凝縮されている印象である。ただし無条件に古の教訓が称賛されているわけではない。人生を後押ししてくれることわざの力を認めつつも、その妥当性に疑問符を呈する視点も忘れていない。そこが著者らしいところであり、本書の奥が深いところだ。中でも「転ばぬ先の杖」の部分は味わいがあり、興味をそそられた。氏は転ばぬ先を考えてとがった生き方をするより、自分の状態を素直に認めて無理して頑張らないことが肝要であるとしている。老年期にさしかかると、人は嫌でも3K（孤独、健康、経済）問題に直面せざるを得ない。しかし悲観的に捉えるのではなく自然の成り行きを楽しむくらいの余裕が欲しい。

こうした信条は氏の近年の他力本願系の宗教への傾斜と関係があるのだろうが、孤独はこの世にたった一人しかいない自分という存在を慈しむいい機会ではないかということが強調されている。人間最後は一人になって静かに去ってゆくのである。長年親しんだ生き方、考え方から距離を取り、心地よい脱力感に包まれてそれまでとは違った視点から人生を眺めてみることも時には必要ではないか。病気にしても、人生の集大成に向けての新たなステップと肯定的に捉えると人生の幅が広がり、何となく展望が開けてくる気がする。

私自身還暦は過ぎてもそこまでは達観していないが、いつの日か「転ばぬ先の杖」にしがみつかなかなくても済む生き方を模索してみたいと考えている。

第7章 芸は身を助く

横田詞輝

週刊朝日に「山藤章二の似顔絵塾」というグラビアページがある。イラストレーターの山藤章二さんが塾長を務め、投稿された似顔絵作品に講評するというスタイルで1981年にスタートした。そのころ学生だった私は「和田誠、針すなお、山藤章二」の似顔絵師3人が好きで、特に風刺にスパイスが効いた山藤さんのファンだった。「似顔絵塾」に投稿を始めたきっかけは、直接似顔絵を見てくださるということ。掲載されようがされまいが関係なく、間接的とはいえ山藤さんと繋がれることが夢のような企画だった。私は絵を学んでいたわけでもなく、似顔絵を10枚描いて1枚も載らなかつたら投稿はやめようと決めていた。毎週1枚ずつ投稿したがカスリもしなかつた。投稿を諦めかけたが、10枚目が佳作(名前だけ掲載される)となった。元巨人投手の金田正一さんの似顔絵だった。私は山藤さんと縁があると勝手に思い込み、似顔絵描きにのめり込んでいった。当初はモノクロ1ページ6作品の掲載で、多い週は400枚もの投稿があったという。400作品で6枠を競うと手練れの常連が枠を独占しかねない。そこで、特待生制度ができた。特待生は毎週の掲載枠は卒業扱いとなるが、年末の「似顔絵大賞」の有資格者となり、本の挿絵やテレビのタイトル画など「お座敷」がかかることもあったらしい。初心者は掲載を狙い、常連は特待生を狙った。私はもっぱらプロ野球選手の似顔絵を描いた。人は髪型や服でイメージも変わるが、野球選手は基本ユニホームでイメージは固定されている。

1987年、22歳で特待生となった。『菊とバット』で知られる作家、ロバート・ホワイティングさんの『ニッポン野球は永久に不滅です』を文庫化(ちくま書房刊)するときに装幀画を依頼されたり、特待生の恩恵を授かるようになった。私は会社員をしながら、似顔絵を描くことを楽しみに生活していた。25歳のとき、仕事の合間に入った喫茶店で手に取った毎日新聞に社員募集の記事が載っていて、応募したところ採用された。編集局整理部図案課という部署で働くこととなり、記事やコラムに挿絵を描くことになった。そのころ、山藤さんの展覧会が全国で巡回展示されていた。私は関西在住で、展覧会を見るためには近畿圏はもちろん、名古屋や東京まで足を運ぶこともあった。ある百貨店の展覧会場で塾生仲間と作品を拝見していると、関係者から、「山藤さんがお昼をご一緒しませんかとおっしゃっている」と声をかけられた。天にも昇る心地で何を食べたかも憶えていないが、そのときに新聞社に転職した旨を伝えると、山藤さんが「芸は身を助く、だね」とおっしゃってくださったことは鮮明に憶えている。

この5月末で毎日新聞社を選択定年退職した。在職中に始まった経済面の風刺漫画「経世済民術」は連載20年を超え、退職後も継続することとなった。風刺漫画に似顔絵は欠かせない。まさか自分の人生が、似顔絵という一芸で生計を立てることになるとは思いもしなかつたが、「芸は身を助く」は、身をもって経験し、ずっと励まされ続けた諺となった

【執筆者紹介（五十音順）】

①氏名（担当者）

②出生年 ③出身地 ④所属

①蟻川 剛（第1部/第1章）

②1950年 ③東京都出身

④公立小学校時間講師 元東京都小学校教諭

①石原 仁誌（巻頭言、第2部/第1章）

②1955年 ③岡山県出身

④朝日生命保険相互会社 代理店業管理部 募集管理担当部長
日本ことわざ文化学会理事

①小森 英明（第2部/第2章）

②1962年 ③三重県出身

④武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員
日本ことわざ文化学会理事

①佐古 恵梨香（第2部/第3章）

②1983年 ③愛媛県出身

④京都外国語専門学校 非常勤講師

①辻 維周（第1部/第2章）

②1955年 ③東京都出身

④岡山理科大学理学部動物学科 准教授

①時田 昌瑞（第1部/第3章）

②1945年 ③千葉県出身

④ことわざ・いろはカルタ研究家
日本ことわざ文化学会会長

①中村 富美（第2部/第4章）

②1962年 ③三重県出身

④三重大学医学部附属病院看護師

日本笑い学会三重支部事務局長 日本ことわざ文化学会理事

【日本ことわざ文化学会】同人誌『コトワザあらかると3号』

- ①藤村 美織 (第2部/第5章)
- ②1958年 ③東京都出身
- ④フリーランス翻訳 (ドイツ語)

- ①三木 恒治 (第2部/第6章)
- ②1956年 ③岡山県出身
- ④岡山理科大学理学部応用数学科 教授
- 日本ことわざ文化学会理事

- ①横田 詞輝 (第2部/第7章)
- ②1964年 ③兵庫県出身
- ④毎日新聞社客員編集委員

日本ことわざ文化学会

ホームページ<https://www.kotowaza-bunka.org/>



『コトワザあらかると』

2019年11月1日第3号 第1刷発行

発行者:日本ことわざ文化学会◎

「日本ことわざ文化学会」事務局

所在地:〒700-0005 岡山市北区理大町1-1

岡山理科大学教養教育センター三木研究室

学会HP : <https://www.kotowaza-bunka.org/>

E-mail : paremio@gmail.com

FAX 番号 : 059-253-2741